

ダニエル書3章16-18節 「私たちの仕える神」

1A イエスを主とする決心

1B 同調圧力

2B 費用の計算

3B 表面的な受け取り

2A 主に明け渡す言葉

1B 自由人としての行動

2B 神の能力への信頼

3B 神の主権への信頼

3A 王への証し

1B 燃える火におられる主

2B 信念を全うする者

本文

ダニエル書 3 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、2 章まで来ました。午後礼拝で 3 章を一節ずつ、じっくり読んでいきたいと思えます。今朝は、3 章 16-18 節に注目したいと思います。「16 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。17 もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」」

私たちはダニエル書を通して、異教の地においてキリスト者として生きていく、その証しを立てていく道を教えられています。ダニエルとその友人三人は、バビロンの言語や文学を教えられ、名前まで変えられて、王に仕えるエリート養成の教育を受けていました。その中で、主ご自身が自分たちをそこに置いてくださっているという確信がありました。ですから、そうした異文化をも甘んじて受けていました。けれども、王の食べるごちそうやぶどう酒については、神の教えに反して身を汚すものとして、それを拒みました。しかし知恵を尽くして、十日の間、野菜だけを食べさせてくださいと宦官の長に申し出たのです。神が宦官の長にダニエルを憐れむ心を与えてくださり、また、野菜だけ食べていたのに、顔色もよく、体つきもふくよかになっていました。

1A イエスを主とする決心

こうやって、私たちはキリスト者として生きる時に、主に対する献身と礼拝に対して、その中にまで入り込んで来ることがあります。3 章の話は、自ら持っている信仰と良心に、とてつもない圧迫と

圧力で妥協を迫って来ることであります。ネブカデネザル王が立てた金の像に、その下にいる役人たち全てがひれ伏して、拝まなければいけないという儀礼行為です。

私たちはしばしば、このような圧力をいろいろな場面で受けます。日本においては、先祖供養やその他の異教の儀式があるのでしょうか。仏式や神式における冠婚葬祭の儀礼で、これだけは偶像礼拝行為であると感じて、それをするを断ります。もし拒めば、それは家族に対して失礼な行為だとみなし、先祖を敬っていないと思われる。私もある時に、日本にいる宣教師に「先祖を敬うことと、先祖供養との違いをどのように説明すればよいか？」という質問を受けました。私はこのように説明しました。「自分たち夫婦の家に、親戚が訪問したとします。彼らを居間、リビングにまでお入れします。けれども、夫婦の寝室までに招き入れるでしょうか？そして、夫婦の寝ている間に、その親戚の誰かを寝かせることはあるでしょうか？」死んだ先祖を思い出すこと、追悼して、先祖のことを主に感謝を捧げることは、先祖を敬うことです。けれども、死者の霊に対して仕えることは、主との間にある交わり、霊にある親密な交わりに、先祖を招き入れることに他ならず、それは偶像礼拝で、霊的姦淫であります。

1B 同調圧力

この時に、私たちに押し掛かる圧迫がありますね。ダニエルの三人の友人は、全バビロンから召集された他の全ての役人が、音楽を奏でる中で一斉にひれ伏すという、とてつもない同調圧力がかかっている中で、それでもひれ伏さなかった決断をしました。パウロは、ローマ 12 章 2 節で、「この世と調子を合わせてはいけません。」と言いましたが、この世の流れに合わせるという圧力を私たちは、しばしば受けます。そうではないようにするには、「私は主のもの。」という信仰告白と決断が必要です。イエス様のみが、私の愛する方、第一の方と決めてしまうのです。

そのように、決めた人が旧約聖書に出て来ます。モアブ人ルツです。自分の姑ナオミは夫を失っており、その息子である自分の夫までも失いました。そして、もう一人のナオミの息子も死にました。その妻オルパがおり、ルツ、そしてナオミの女三人だけになりました。ナオミが故郷ベツレヘムに戻ろうとした時に、「あなたがたは、あなたがたの母の家に帰りなさい。そこで夫を新たに得なさい。」と言いました。弟嫁のオルパは帰りました。ナオミも、「あなたもそれに倣って帰りなさい。」と言いました。しかしルツは言いました、「あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。あなたの死なれる所で私も死に、そこに葬られたいのです。(1:16)」流れが故郷に帰れ、であっても、ルツはナオミの神を自分の神、ナオミの民を自分の民としました。

2B 費用の計算

そして、決めてしまう人は、いろいろな犠牲があるかもしれないことも鑑みて、それで主に従うことを決めています。イエス様が十字架の道を歩まれている時に、多くの群衆が付いてきていました。そこでイエス様は言われました。「ルカ 14:26-27 わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄

弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」そして、費用を計算する喩えを語られました。「14:28-31 塔を築こうとするとき、まずすわって、完成に十分な金があるかどうか、その費用を計算しない者が、あなたがたのうちにひとりでもあるでしょうか。基礎を築いただけで完成できなかつたら、見ていた人はみな彼をあざ笑って、『この人は、建て始めはしたものの、完成できなかった。』と言うでしょう。また、どんな王でも、ほかの王と戦いを交えようとするときは、二万人を引き連れて向かって来る敵を、一万人で迎え撃つことができるかどうかを、まずすわって、考えずにいられましょうか。」

ちょうど、これは結婚する時に、「健やかな時も、病める時も」という誓約と似ています。求婚をしている時に、結婚する相手や候補に対して、自分に合っているかどうか、いろいろな条件を心の中に置いていることがあります。しかし、そのような条件を付けた時に既に結婚する資格がありません。健康な時だけでなく、病んでいる時も共にいると決めるのです。同じように、イエス様について行くときも、たとえ犠牲が生じてもそれでも従いますという、費用の計算が必要となります。

3B 表面的な受け取り

そして、主の御言葉を心で受け入れる必要がありますね。種まきの喩えにおいて、岩地に蒔かれた種と、良い土地に蒔かれた種の違いがあります。岩地は、「みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れるが、根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまづいてしまいます。(マルコ 4:16-17)」根を張らないという問題があります。みことばを聞くのですが、心に受け入れていない。みことばを喜ぶのですが、みことばには困難や迫害が伴います。だから、しっかり心に受け入れないといけない。それをしないので、つまづいてしまいます。信仰を始めた時はよいのですが、最後まで走り通さないのです。このように、決心の無い人の生活はいつも、実を結びません。いろいろなことをしているのです、けれども何も残りません。ですから、自分の努力や頑張り、何をやってきたかという量ではなく、今、与えられている御言葉に対して誠実に応答したか、ということが問題なのです。

2A 主に明け渡す言葉

では、ネブカデネザルに、「あなたがたは、金の像にひれ伏さなかつたら、燃える火の炉に投げ込まれる。どの神が私の手の中から救い出せよう。」と言った後の彼らの反応を読み直します。

1B 自由人としての行動

16 シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。」

第一に、彼らは自由な人でありました。神のみを主としており、この方に仕えていました。神を畏

れていたのに、神の立てられた王を敬っていました。しかし、神を畏れていたからこそ敬っていたのです。ですから、状況がどのように変わろうとも、それは自分たちには大きな違いではありません。これまでのことを、ただ忠実にしていくまでであります。ペテロ第一 2 章 16 節を読みます、「あなたがたは自由人として行動しなさい。その自由を、悪の口実に用いないで、神の奴隷として用いなさい。」全てのことに自由なのです。そして、神の命令に従っているからこそ、神の奴隷になっているからこそ、他のものに自由でいることができます。

2B 神の能力への信頼

17 もし、そうならば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。

第二に、彼らは神の力に全幅の信頼を寄せていました。神は、救い出すことができるというものです。神がそれを御心としておられるなら、神にできないことは何一つありません。「エペソ 3:20 どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、」[ピリピ 4:12-13 私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にいる道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。]救うことができる力を神が持っておられます。

私たちに足りないのは、迫害に耐える力がないということではありません。困難や迫害が来た時に、神が助ける能力を持っているという信仰が足りないのが問題なのです。耐えられるのか、耐えられないか、という想定や予測を立てていること自体が、自分の力で何とかしようとする試みであり、その時点で信仰ではなく恐れが入っています。主が行なってくださるのだから、大丈夫。主の能力を見つめるのです。

3B 神の主権への信頼

18 しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。

第三に、彼らは神の主権を信頼していました。神が救ってくださると信じているのに、あれ？ここでは、信じていないように見えるのだけれども？と疑問を抱かれたのであれば、それは神のご性質を誤解しています。主は、命を救うことも、また命を取られることも、どちらもすることのできるお方です。ですから、主が御心ならば、必ず救われます。主が自分の命を取るとお決めになっているのであれば、燃える火の炉の中で燃やされることもあるのです。それは、主がお考えになっていることですから分からないのです。ヨブが、財産も子供も取られた時にこのように、主をほめたたえました。「ヨブ 1:21 私は裸で母の胎から出て来た。また、裸で私はかしこに帰ろう。主は与え、

主は取られる。主の御名はほむべきかな。」主は与えられる時に主だけでなく、取られる時にも主であります。

そして、ここには、「自分で想定する範囲外において、神が働いておられる。」という信仰があります。自分が神は能力があるから、これこれをするはずだと私たちは想定しています。その期待が外れると、神に力がないのか？という疑問を抱くのですが、それは間違いです。なぜなら、それは自分の理解の中で、「神はこのようなことをするはずだ」と思っているだけで、神は自分の思いをはるかに超えて、私たちの願いをかなえられるからです。

3A 王への証し

このように彼らは王に申し上げました。そして王は怒りたけります。なんと、火を七倍熱くせよと命じます。そして彼らを縄にしばったまま、炉の中に入れました。

1B 燃える火におられる主

私たちは1章における、ダニエルの決心のところでも見ましたが、決心をした者にとって、それは平安のある立場です。全てを主に明け渡した者にとって、自分が主役ではなく、主なる神が主役です。ですから、主が自分のために行ってくださいるのであり、自分で自分のことを何かしないといけないのではないのです。したがって、ここでも主が試練の中におられます。シェイラ・ウォルシュというキリスト者の歌手がこう言いました。「平安は、問題がないことではなく、キリストが臨在していることだ。」問題がなくなるから平安になるのではなく、問題の中にキリストがおられるから、平安なのだということです。主が共におられ、実に火の中においてさえ、主が彼らと共に歩かれていました。

2B 信念を全うする者

そしてネブカデネザルは称賛します。「3:28 ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。」ネブカデネザルは、彼らが自分の命令に背いたのに、彼らの神をほめたたえています。それは、自分の命令を背いても、もっと大事なものがある。その一筋な姿、一貫している姿、妥協しない姿が、かえって信頼をもたらしたのです。私たちはあまりにも、人に誤解を与えないように、恐れながら動いていることがあまりにも多いです。しかし、人々は見えています、一貫性のある人、神を信じているのなら、信じている人らしく生きているのかどうかということを、私たち信者が考えている以上に見えています。この世にないのは、その一途さであります。世の流れに生きていますから、いつでも変わるし、自己保身になっています。その中で、真心から動き、そのような圧迫から自由にされている姿を見て、かえって尊敬されるのです。それが、地の塩と言ってよいでしょう。人々に渴きをもたらします。神を求めるようにさせる力を持っています。